

〈論文〉

ベネターの基本的非対称性における非存在の検討

榊原 清玄

〔要旨〕

基本的非対称性においてシナリオ B は感性的主体 X が存在しないケースとされているが、X が存在していたとしても苦がない状況は想定できる。そこで、なぜベネターはシナリオ B を非存在にしているのかを検討することが目的である。これによってベネターの強い反生殖主義¹に肉薄することができる。その過程で、基本的非対称性における様々な事項を整理している²。

〈目次〉

1. 快苦の性質に関する注記
2. ベネターの反生殖主義
 - 2.1 ベネターの基本的非対称性
 - 2.2 存在しないことの様態
 - 2.3 基本的非対称性に関して確認しておくべきこと
3. 非存在の無関係性？
4. 結論

1 強い反生殖主義とは、いついかなる場合でも生殖は正当化できるものではないという立場である。弱い反生殖主義は生殖が正当化される場合があることを認める。

2 本稿では反出生主義という言葉は使用しない。なぜなら、「出生」という語は多義的であるため、混乱を引き起こしやすいからである。Cf. 榊原 (2021b). 「出生」という言葉の分析は中川 (2020) を参照せよ。

(時間がない人のために)

本題は3節なので、ある程度ベネターの議論を知っている場合はそこだけを読めば良い。

(本当に時間がない人のために: 要約)

ベネターは基本的非対称性によって、ある感性的主体 X が存在しないシナリオ B が望ましいと結論する。生命には必ず苦しみが伴いそれは悪いことであるが、非存在による快の不在は悪くないからだ。しかし、シナリオ A においては、存在していたとしても苦しみを除去する方法があり、シナリオ A においても苦を不在とすることができる。シナリオ B が望ましいとしても、なぜ非存在のケースにするべきかをベネターは明示的に論証していない。

1. 快苦の性質に関する注記

ベネターは、自身の反生殖主義を擁護するためにいわゆる基本的非対称性を提示している³。これは存在と非存在が経験する利益(interest)と害(harm)⁴に対する非対称性である。その議論のなかで、ベネターは利益の例として快(Pleasure)、害の例として痛み(pain)としている⁵。基本的非対称性を吟味するうえではこれらを明確にする必要がある。

どういうことか。例えばマッサージで強く肩を揉まれている状況を想像してみてもいい。そのときマッサージされている人が、痛い気持ちいいと感じた場合、その人は痛みを感じているが苦しんでいる(suffering)わけではないことに注意する必要がある。痛みは苦しみそのものではない。サムナーによれば、感覚による痛みというのは病気や怪我によって生ずる症状に過ぎず、それがどれくらい重大なのかは個人の主観的評価によって変動する。他方で苦しみは、狭義の主観的経験も含むより広範なものなのである⁶。以上の議論に鑑みるならば、われわれは苦痛の「苦」と「痛」を分

3 「基本的非対称性」という名称は以下から。Benatar(2012), p. 128. なお、「価値論的非対称性」と呼ぶこともある。Cf. Benatar and Wasserman (2015), p. 21.

4 フェインバーグが指摘するように、害(harm)と悪(wrong)は別である。害するからといって直ちにその行為が悪いわけではない。逆に害を与えていなくても悪い行為がある。Cf. Feinberg (1984), pp. 34-35.

5 Benatar (2006), p. 30. ちなみに、ベネター自身は功利主義者ではないと明言している。Benatar (2013), p. 122n6.

6 Sumner (1996), p. 103.

けるべきであるし、現にわれわれは日常的にその区別を行っているはずである。以下の例では、感覚を失っているにもかかわらず快を感じることができていることを示す。

あるバイク乗りが大事故を起こして瀕死の重体に陥っている。医者は手術をするために強力な麻酔薬を投与した。それによって患者は痛みを含む一切の感覚を失う。それにもかかわらず、患者は、自分が死ななかつたこと、自分のバイクが損傷しなかつたことに喜びを感じることができる⁷。

この事例では、狭義の感覚的な快と痛みは麻酔薬によって消滅させられている。にもかかわらず、大怪我をした患者は喜びという広義の快を持つことができている。他方で、例えばグロテスクな光景を収めた写真を見た場合、それによって痛みを感じることはないが嫌悪感を持つだろう。これも痛みがない苦しみの一例である。

このような快苦観が主張するのは、「ある感覚経験に対しそれ自体を快楽とするような特質が存在するのではなく、それらは我々がそれらにどのような態度を取るのかという感覚経験に外在的な要因で決定される⁸」。つまり、ある感覚に対して肯定的態度を取ればそれは歓楽 (enjoyment) であり、否定的態度を取ればそれは艱苦 (suffering)⁹ である。これは態度的快楽説と呼ばれる。そしてこのような立場のもとでは、態度の対象は狭義の感覚経験だけに限定されない。その対象は、普通の欲求と同じように命題あるいは命題相当物である¹⁰。快 (pleasure) と痛み (pain) は感覚的快苦に限定し (感覚的快楽説)、広義のそれとは区別する必要がある。感覚の痛みとは異なり、態度的艱苦は個人がある対象に対して否定的な価値を付与している状態をいう。とするならば、その言葉の定義上、態度的艱苦の条件として、その対象はその態度を取っている者にとって悪いものであることが要請されるのである。

さて、ベネターが利益と害の非対称性を論じているとき、その快苦は感覚的快楽説のものか、それとも態度的快楽説のものだろうか。ベネターは、生殖によって子どもに与えられる「利益」 (benefit) と「害」 (harm) の価値には非対称性があり、それら二つの例として快 (pleasures) と痛み (pains) をあげていた。利益と快がどのような関係にあるかが明らかではないが、害が痛みを包括するという点で、ベネターの言う快苦は態度的快楽説のものであると解釈できるだろう。

7 Feldman (2004), pp. 56-7.

8 安藤 (2007), p. 145.

9 本稿では艱苦は苦しみと同じ意味として扱う。

10 *Ibid.*

態度的快樂説を取った場合、それはベネターの主張に対してどのような影響を及ぼすだろうか。生まれてきた子どもが生きていくなかで否定的な態度を取ることが艱苦になるため、態度的快樂説の方が感覺的快樂説よりも生殖に対する制限は厳しくなるように思われる。ベネターは、それなりに利益のある人生でも一刺しの針による痛みがあれば、それによって非存在よりも悪い人生であると言っているが¹¹、態度的快樂説の場合は針の痛みではなくて、些細な嫌悪を感じただけでもその人の人生は非存在よりも悪いことになる。

ここまで、狭義の感覺的快苦と実際にわれわれが感じる喜びや苦しみは必ずしも一致しないことを述べた。以上の快苦観に則れば、ベネターの反生殖主義が問題にするのは、生殖によって引き起こされる（特にその生まれた子どもが一生のうちに感ずる）艱苦の正当性である。

本節で行った分析に加え、自分自身の快苦と他人に与える快苦を区別することにしよう。ある主体が感じるものは歡樂 (enjoyment) と艱苦 (suffering) とし、他人に与えるものは利益 (interest/benefit) と害 (harm) と呼ぶことにしよう。

2. ベネターの反生殖主義

2.1 ベネターの基本的非対称性

ベネターが反生殖主義を擁護するにあたって、まず快苦（利益と害）の非対称性を論じる。それから、我々が自身の人生に対する評価はバイアスに満ちたものであって、実際は人生というものは苦しみに満ち溢れたものであるとする議論を展開する (QOLの議論)。この二つのステップは生まれてくるものの観点からなされるために博愛主義的反出生主義とベネターは呼ぶ¹²。それに対して、人間は他の感性的主体にあまりに多くの苦しみを与えすぎているからそれらの苦しみを無くすために人類は滅亡するべきであるという厭世主義的反出生主義も主張できるという¹³。本稿では、基本的非対称性だけに着目して議論を進める。

ベネターによれば、利益 (benefit) と害 (harm) には価値的非対称性があるという。それは以下のように示される¹⁴。

11 Benatar, *op. cit.*, p. 48.

12 *Ibid.*, p. 223.

13 詳細は Benatar(2015) を参照。

14 混乱を避けるために、Benatar(2006) におけるように快 (pleasures) と苦 (sufferings) の非対称性ではなく、Benatar and Wasserman (2015) のように利益 (benefit) と害 (harm) の非

- (1) 害が存在しているのは悪い (bad)。
- (2) 利益が存在しているのは良い (good)。
- (3) 害が存在していないことは良い。それはたとえ誰もその良さを享受していなくても良い。
- (4) 利益が存在していないことは、こうした不在が誰かにとって剥奪を意味しない限り、悪くない。

以上が基本的非対称性もしくは価値論的非対称性である。図にするとこうである。

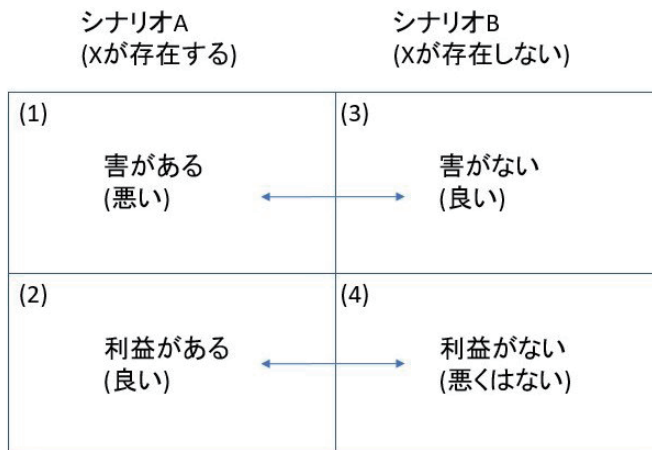


図1 利益と害の非対称性¹⁵

ベネターはこの図式に従って議論を進める。簡潔に確認しよう。ある感性的主体 X が存在するシナリオ A では、生きていく中で X は利益と害を受ける。このとき、害があることは悪く、利益があることは良い¹⁶。

シナリオ B では X が存在していない。そうすると利益と害は生じないことになる。害の不在は良いのだが、それはその良さをすべての人が享受せずともそうであり、利益の不在は奪われたものでない限り悪くはないのである。この二つのシナリオを比較すると、害が存在するよりも害が無い方が望ましい一方で、利益の不在は利益が存在するよりも悪くはない。したがって X が存在するシナリオ A は、X が存在しないシ

対称性にした。

15 以下を参考に筆者が作成。Benatar and Wasserman (2015), *op. cit.*, p. 23.

16 これはその利益自体や害自体の価値が良い／悪いという話ではなく、むしろ生殖行為によって引き起こされる事態への評価である。

ナリオ B を優越せず、むしろ劣位にあることが示される。したがって、シナリオ B が望ましいということになる。これが基本的非対称性の大きな内容である。

この議論に対して、X が存在するシナリオ A と X が存在しないシナリオ B を比較することは果たして可能なのか、という疑問が惹起されるだろう。X が存在していないのにそれが望ましいというのはどういうことか。ベネターは、現に存在しない者にとってシナリオ B が望ましいとしているわけではないと言う¹⁷。そうではなく、「存在するであろう者」もしくは「存在するようになった者」の観点から評価されるのである¹⁸。つまり、現在は存在していない者がいたとしたら、その人が存在したとする状態を想定して、それを現在の状態と比較するのである。したがって、非存在者そのものの観点を取るのではない。つまり、ベネターは、「非人称」(impersonal)の観点から二つのシナリオを比較しているのではなく、まったく存在しない者が、もし存在したとしたらどちらが望ましいかという比較をしているのである¹⁹。

さらに、ベネターは、この基本的非対称性が以下の四つの非対称性を上手く説明できると主張する。この四つの非対称性は広く受け入れられることができるものとベネターは述べ、これらを使用して自身の議論の説得力を向上させようとする²⁰。

(i) 生殖に関する義務の非対称性：苦しむ人々を生み出さない義務はあっても、幸福な人々を生み出さなければならぬ義務はない。なぜなら、害があるのは悪いことだが、利益がないのは悪くはないという非対称性があるからである。

(ii) 予想される利益の非対称性：仮に子供自身が「生まれて利益を受けたい」と考えていると想定し、子供自身の意志を理由に子供を生むことはおかしいが、子供が受けるであろう潜在的な害を理由に子供を生まないのはおかしいことではない。なぜなら、利益がないのは悪いことではないため、子供自身のためを思って子供を生まなくても悪いことではないし、むしろ子供のことを考えるならば、生まないという選択肢はもっともであるから。一方で害を受けるのは悪いことなので、子供に配慮するならば生まないという選択は当然考慮されるべきである。

(iii) 回顧的利益の非対称性：人を存在させても、させなくても、どっちにしても後悔することはある。しかし、当人のことを思って後悔する場合は、子供を生んでし

17 Benatar (1997), p. 350.

18 *Ibid.*

19 後に述べるが、これは未だ存在しないがこれから存在することになる「未存在」と、今も存在せずこれからも存在することのない「非存在」の比較をしている。

20 これから示す四つの非対称性は以下を参照している。Benatar(2013), pp. 129-130; 榊原(2021a), pp. 234-235.

まった場合である一方で、生まなかつたことを悔いるのは子供のためではなくて自分のためである。つまり、子供を生まなかつたことを悔いる場合、それはあくまで自分の利益について悔やんでいるのであって、まだ存在していない子供のことを考えて悔いるはずはない。子供を生まなかつたことを悔やんでいる場合、それは、自分が子供を生んでいたらできたであろう育児や出産の経験ができなかつたことを悔いるはずである。つまりそれは生まれてくる者の利益が存在していないことを悔やんでいるのではない。したがって子供のことを思って子供を生まなかつたことを悔いるはずはない。なぜなら、まだ存在していない利益は悪くはなく、奪うものそのものがないことを悔いることは不可能だから。したがって、子供を存在させてしまったことを後悔することはあっても、子供を存在させなかつたことを後悔することはない。

(iv) 遠くで苦しむ人々と存在しない幸せな人々の非対称性：存在してしまうことがありえた人が害を受けることは残念に思うことができるが、その人々の利益が存在しないことを残念に思いはしない。なぜなら、害に彩られた人生を生きている異国の住民のことを残念に感じることはできるが、人の住んでいないある島のことを耳にしても、もし存在していたらその島に住んでいたであろう幸福な人々のことを思って同じように悲しくなったりしない。つまり、存在したかもしれない人が害を受ける可能性を残念に思っても、受けなかつたということについて思いをはせても大喜びはしないからである。

以上の四つの非対称性が成立するとき、ベネターは自身の基本的非対称性がこれらの非対称性を最もよく説明できると主張する。なぜなら、害の不在は良くて、奪われたものではない限りは利益の不在は悪くはないからである。

2.2 存在しないことの様態

非存在という状態には様態があることを指摘したい。ベネターは、「非存在」(non-existence)という言葉が曖昧であることを指摘する。

その語は決して存在しない人にも当てはめられるし、今現在の時点で存在していない人にも当てはめられる。後者の場合は、更に、まだ存在していない人と、もうすでに生きてはいない人に区別できる。ここでの文脈においては、私は「非存在」という語を絶対に存在しない人を指して用いる²¹。

21 Benatar (2006), p. 30n22.

以上の区別を踏まえながら、これらの様態の差異に名称を付けて明確にしたい。今も存在せず、これからも存在しない者は「非存在」とする²²。次に、未だ存在していない者を「未存在」とし、前は存在していたが今はもう存在していない者は「不存在」とする。「不」という言葉は後に続く語が一般にプラスの価値があると考えられることが多い。例えば、不人気、不景気、不利益。かつては存在していたのにそれがなくなってしまったのだから、剥奪されているというニュアンスを付与するために「不存在」という語を採用した。その関係を図にすると以下ようになる。

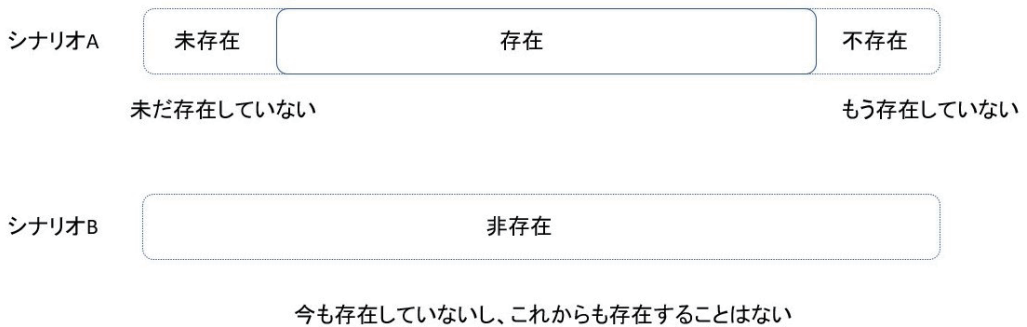


図2 非存在の様態関係

シナリオ A はある感性的主体 X が一度存在するシナリオであり、シナリオ B は X がかつて存在することはなく、今も存在せず、これからも存在することがないシナリオである。ベネターが肯定しようとしているシナリオは、この非存在である。

2.3 基本的非対称性に関して確認しておくべきこと

さらに、基本的非対称性に関して四つの点を指摘する必要がある。

(a) 苦の必然性

実は、基本的非対称性を導入する前に、ベネターはある一つの前提を置いている。それは、人生には必ず何らかの苦しみが生じるというものである。これを「苦の必然性テーゼ」と呼ぼう。ベネターはこう言う。

22 かつて存在せず、今もこれからも存在しないような状態はむしろ「無存在」という語の方が適切のように思える。「無」という語はまったくないというニュアンスを出す一方で(例えば無表情、無関心、無意識)、「非」という語は単なる否定の意味を付与するに過ぎない。しかし、ここは混乱をさけるため、ベネターに従い「非存在」とした。

実際のところ、悪いことは我々全員に対して起こる。苦境無しの人生は存在しない。何百万の人が貧困や何らかの障害に苦しめられながら生きていることを思い浮かべることが容易である。幸運にもこのような運命を免れている者もいるが、そうでない者の多くは、人生のどこかで苦痛に悩まされる。たとえ最期の時であっても、耐え難いほどの苦しみを伴うことがある。ある者は、生まれながらにして何年も虚弱であることを宣告されていることもある²³。

ベネターは、我々の人生には必ず苦しみが発生すると述べる。その苦しみが具体的にどのようなものか、どれくらい深刻なものかはわからずとも、何かしらの苦しみが発生することは確実であるという²⁴。この前提を掘り下げて展開される議論がQOLの議論である。

しかし、この前提はエンピリカルなものであるから、科学技術の発展や社会問題の解消によって苦しみを無くしていくことが可能である。現にそのような方向性で反生殖主義を克服しようとする論者がいる。それらは後ほど検討する。

(b) 他者の行為への評価

基本的非対称性が対象にしているのはある感性的主体 X 内の快苦ではなく、他者への影響である利益と害であることを忘れるべきではない。なぜならば、我々は自分自身の意志でこの世に生まれるのではなく、生殖を行う者によって生み出されるからである²⁵。もし出生が自分自身の意志のできるのであれば、基本的非対称性の議論が成立しても勝手に生まれてきてしまうのだから、出生を止めようがない。

生殖は必ず誰かが意図して行うものである。では、生殖はどう悪いのか。生殖それ自体は、生み出される者に害をなしているわけではない。というのも、単に生殖は自らと同じ個体を作り出す行為に過ぎないからである。むしろ、生殖の悪さとは生み出された者が一生の中で様々に害されるようになることを引き起こしたことにあり、害を受ける感性を生み出したことによるのだ²⁶(Cause that make a sentiment possible to be harmed)。

23 Benatar (2006), *op. cit.*, p. 29

24 Benatar (1997), *op. cit.*, p. 345.

25 第3節において、快苦の非対称性ではなく、利益と害の非対称性としたのはその理由からであった。

26 Harman (2004), p. 93.

(c) 続ける価値のある生命と始める価値のある生命

「生きる価値がある生命」には二つのタイプがあるとベネターは指摘する。一つ目は「続ける価値がある生命」(a life worth continuing)であり、もう一つは「始める価値がある生命」(a life worth starting)である²⁷。ベネターによれば、生命の価値を評価するときにこの二つを混同する者が多いという。例えば、これから生まれてくる者はあるハンディキャップを持っているとしよう。そのハンディキャップによる負担が著しいにもかかわらず、既に生まれてしまった場合は死んでしまうことの不利益が大きいために生きることを続けた方がよい、とすることができる。しかし、そのような障害を持って生命を始めさせるにはそれは生まれる者にとって負担が強すぎると思うだろう²⁸。

さらに、ある生命に続ける価値があるかはその生命を生きる者自身が判断するのだが、生まれる価値については生殖する者が判断するという違いにも注目して欲しい。まだ生まれていない者が自分自身の意志でこの世に生を受けることはできない以上、ある生命に始める価値があるかどうかは今生きている者の観点からなされる。となると、それは実際に生まれた者が価値と見なしていないものを一方的に価値があるとみなされる可能性がある。逆に、生まれてから様々な価値があると判明する場合もあるかもしれない。しかし、それは実際にその生命を生きてみないとわからないことであり、苦しい人生を送らせてしまうかもしれないリスクを冒すことに注意する必要がある。

3. 非存在の無関係性？

ベネターは、基本的非対称性は利益と害の価値論的非対称性を単に示しているに過ぎないと述べる²⁹。この非対称性そのものが反生殖主義的結論を導くわけではない。基本的非対称性のみでは、生殖は常に害を与える行為ではあっても、間違い(wrong)であると主張しきれないのはベネター本人も認めている³⁰。そこで登場するのは、人生で人は必ず何かしらの苦しみに直面するという前提(苦の必然性テーゼ)と、生命には大きな苦しみが付きまとうことを示すQOLの議論である。これを回避するためには生殖をせずに人を非存在のままにさせておくことしかないのだとベネターは主張

27 Benatar (2006), *op. cit.*, p. 22.

28 *Ibid.*, p. 23.

29 Benatar and Wasserman (2015), *op. cit.*, p. 15.

30 *Ibid.*, p. 40.

する。したがって、ベネターは自身の反生殖主義の帰結として段階的絶滅を主張するに至る³¹。

しかし、実は、反生殖を主張したとしても非存在を肯定しない立場は可能である。それは、苦の必然性テーゼと QOL の議論を克服するものである。その立場を紹介したい。ピアースによれば、バイオテクノロジーの発展がするに伴い、我々が経験する苦しみを取り除くことができるようになるという³²。具体的な方法は二つある。

一つ目は、脳内の神経がどのように作用するかが解明されることによって、幸福感や不快感の制御が可能になるというものである³³。先述したように快と苦が態度的なものとするならば、神経の構造をコントロールすることによって苦のない生命を生み出せるかもしれないし、今生きている我々も苦しみを感ぜないようになることができるかもしれない。しかしこれは、そのような制御をどこまで許してよいか、などの倫理的問題を新たに発生させるだろう。

二つ目は、デザイナーベイビーの技術である。それは、生殖を行う者がその子どもに対して遺伝子の構造を選択する技術である³⁴。この技術が開発されたならば、生殖をしたとしても害を子どもに対して引き起こすことを防ぎ、ベネターによる苦の必然性テーゼと QOL の悪さを回避できるかもしれない³⁵。

しかし、それによって生殖が完全に正当化できると楽観的になることはできないだろう。そのような技術が悪用される危険性は存在する上、以上の技術ですべての苦しみが除去されるとも限らないからだ。ベネターは、生命における苦しみの例として貧困や障害をあげていた。もしそれらの状況に陥ったとしても苦しみを感ぜないようになったからといって、貧困やハンディキャップ³⁶が悪いものではないと言うのはおか

31 Benatar (2006), *op. cit.*, pp. 163-196.

32 Pearce (2005). より詳細な議論は、Pearce (2007) および Pearce (2015) を見よ。

33 *Ibid.*

34 *Ibid.*

35 これは優生思想ではないか、という反論が当然予想される。しかし、社会のために個人の生命を操作するのではなく、あくまでもこれから生まれてくる者のためにその苦しみを除去する行為をも優生思想として非難されるのであれば、それがなぜなのかを議論する必要があるだろう。私は、優生思想は今一度真剣に検討されるべきであると信じている。社会ではなく個人の厚生観点から子供の遺伝子を選択することを「リベラル優生主義」と言うが、それを詳細に検討したものとして桜井 (2007) があり、からだを操作することの倫理性を議論したものとしては佐藤 (2021) がある。

36 障害に関してはさらに微妙な問題がある。社会モデルにのっとるならば、ある人にハンディキャップがあるかどうかを判定するのは社会である。私は視力が悪いが、眼鏡があるおかげで不自由なく生活できている (ハンディキャップがない)。しかし完全に目が見えなく

しいだろう。ピアースの議論は感性そのものを改善する方法であり、それに加えて害を与える外的要素をも除去しなければならない。

苦しみを受容する感性の改善、外的な害の除去が上手くいくかどうかは未決としなければならないけれども、反生殖主義が導かれた場合でも非存在だけが望ましいと言う必要性はないことは少なくとも示すことができたはずである。つまり、生命における苦の必然性を排除することで生殖の倫理性を担保することができる。

ベネターもシナリオ A の苦を除去することがシナリオ A 内でできることを認めている。ベネターはブラッドレイの反論³⁷に対応するために、基本的非対称性の図を拡大している。そこで以下の図を見てほしい。

シナリオA (Xが存在する)		シナリオB (Xが存在しない)
(5) 害がない (良い)	(1) 害がある (悪い)	(3) 害がない (良い)
(6) 利益がない (悪い)	(2) 利益がある (良い)	(4) 利益がない (悪くはない)

図3 拡大版基本的非対称性³⁸

図1と図3の違いは、図3には新たに(5)と(6)が追加されているところにある。(5)と(6)はシナリオAに属する。ここで注目して欲しいのは、ベネターは(2)の否定として(6)が可能であることを認めていることである³⁹。ベネターが反生殖主義を主張する理由は、生命は害を経験し、その害は悪いものであるからだった。上の表を見ると、(1)を回避する方法が(3)と(5)の二つがあることがわかる。だとすれば、(3)だけを苦を回避する唯一の方法とするにはさらなる正当化が必要になる。

ここで疑問をもたれる人がいるかもしれない。シナリオBでは、非存在だから害

なってしまった人はそれを改善する技術がないからハンディキャップを持っているだと判定されてしまうのである。しかし、もし眼鏡が無ければ、私もハンディキャップを持つのだ。

37 ブラッドレイがどのような反論をしたのかは本稿では重要ではない。

38 以下を参考に筆者が作成。Benatar (2013), *op. cit.*, p. 136.

39 *Ibid.*

と利益はないから (3) と (4) の状態のみになるのに対して、シナリオ A の場合では害の状態は (1) と (5) の二種類があり、利益の状態も (2) と (6) の二種類がある。シナリオ A では利益や害がどれくらいあるかどうかはわからないから確実性の観点からシナリオ Bの方が望ましいように思えるし、シナリオ A では利益がない場合もあることに鑑みると、利益がなくともそれが悪くないシナリオ Bの方がいいのではないかと。

以上の疑問に対しては、このように応えたい。確かにシナリオ Bにおいては必ず (3) と (4) の状態になる一方で、シナリオ A の場合は (1)、(5) と (2)、(6) のそれぞれが組み合わせられる。場合分けしてみよう。

ケース 1 : (5) と (6) の組み合わせ 害がなく利益もない (害がないのは良いが利益がないのは悪い)

ケース 2 : (5) と (2) の組み合わせ 害がなく利益がある (害がないのは良く利益があるのは良い)

ケース 3 : (1) と (6) の組み合わせ 害があり利益がない (害があるのは悪く利益がないのは悪い)

ケース 4 : (1) と (2) の組み合わせ 害があり利益がある (害があるのは悪く利益があるのは良い)

以上のケース群を図にすると以下になる。

<p>ケース 1 : (5) と (6)</p> <p>害がなく利益もない (害がないのは良いが利益がないのは悪い)</p>	<p>ケース 3 : (1) と (6)</p> <p>害があり利益がない (害があるのは悪いが利益がないのも悪い)</p>
<p>ケース 2 : (5) と (2)</p> <p>害がなく利益がある (害がないのは良いが利益があるのは良い)</p>	<p>ケース 4 : (1) と (2)</p> <p>害があり利益がある (害があるのは悪いが利益があるのは良い)</p>

図 4 シナリオ A 内のケース群

ケース3とケース4ではシナリオBよりも望ましいとは言えないことは認めよう。なぜなら生殖によって、生まれた個体に害が及んでいるからである。ケース2はシナリオBよりも望ましい。害がなくかつ利益があるからである。しかし、ケース1がシナリオBよりも望ましいかどうかは疑わしい。というのも、ケース1もシナリオBも害がない状態は良いのは同じだが、利益がない状態はケース1では悪いとされているがシナリオBでは悪くはないとなっているからである。

このことに関して、シナリオAの(6)で利益がない状態が悪いとなっている理由を確認したい。ベネターが上記の拡大版基本的非対称性を提示したとき、ベネターは「ある人物が利益をもっていないことは悪い」と端的に考えていたようである⁴⁰。だが、シナリオBの(4)で利益の不在が悪くないのは、それが剥奪ではない限りそうであった。とするならば、シナリオAの(6)の利益の不在にもそれが当てはまる可能性はあるだろう。ベネターは(6)において快樂の不在がどのように悪いかを説明していない。

とはいえ、ケース1では利益が不在となってしまうそれが悪いと評価される場合が生じうるから、確実性の観点からシナリオBの方が望ましいという主張はなお有効である。さらに言えば、そもそも害が存在するケース3とケース4から害が存在しないケース1とケース2に移行できるかどうかすらわからない。

したがって、基本的非対称性にとって非存在が無関係である、という主張には直ちには結びつかない。残念ながらいったん留保をつける必要がある。つまり、現時点では技術的に苦を完全に除去できるかが不明であるから、今は非存在が完全に無関係とまでは言えない。つまり、生殖による害を回避する方法は絶滅しかないことを否定できない可能性がある。

しかしながらここまでで明らかにしたように、生殖による苦しみを回避する手段として非存在のままにしておくことだけがあるわけではない。人生における苦しみを排除する技術、害を与えない社会体制を作り上げることができれば、感性的主体の絶滅が望ましいとする理由はなくなる。

むしろ、ベネターが主張する段階的絶滅によって苦を除去する方法には実践的な問題がある。ピアースが指摘するように、仮に反生殖主義の実践が行われたとしたら、その者たちは生殖を行わないためにその思想を伝搬する者が減っていく。他方で、反生殖主義者ではない大多数の者は生殖をし続けるはずであるから、子孫を残すことでより多くの影響力を拡大するはずである⁴¹。そのようにして反生殖主義者が最終的に

40 *Ibid.*

41 Pearce (2005), *op. cit.*.

淘汰されていってしまうのだ⁴²。

しかし、今述べた難点は反生殖主義そのものへの反論というより、むしろ非存在によって苦を取り除こうとする絶滅主義 (extinctionism) への反論だったのである。非存在だけが唯一の方法ではなく、しかもそれには困難があるならば、存在しつつも苦を除く方法を模索することが検討されても良い。

そして、ベネターが段階的絶滅を主張するとき、ベネターは反生殖主義とさらに絶滅主義を主張したことになる。ベネターは、なぜ非存在だけが苦しみを無くす手段なのか、なぜそれしか方法がないのかを示していない。ベネターにとっては、生命に害が付きまとうのは、「経験的事実の問題である」(a matter of empirical fact)⁴³。そうであるならば、我々はそれを改善することができるだろう。基本的非対称性において非存在が無関係であるのは、図3においてシナリオ B だけが苦を排除する唯一の方法であることが示されていないからである。なぜシナリオ A だけで完結してはならないのか。

4. 結論

ベネターの基本的非対称性を吟味し、シナリオ B がシナリオ A よりも好ましいからといって、非存在が好ましいとは言えないことを示した。そうすることによって、感性的主体の絶滅を回避しつつも生殖に伴う苦の発生を防ぐことができる可能性を確認することができた。しかし、技術的にこの世界の苦をすべて除去できるかどうかはわからないと言わざるを得ない。とはいえ、生殖の倫理性を問うために必ずしも非存在(絶滅)を肯定する必要はなく、反生殖主義と絶滅主義は別の立場であると論証することができただけでも大きな収穫である。

謝辞

本稿は哲学若手研究者フォーラムに発表した原稿をもとに加筆修正をほどこしたものです。

42 しかし、トレスが述べるように、「人類の存続に価値を置き」かつ「道徳的な理由から生殖に反対する」方法として、延命技術による「機能的不死」を達成することで絶滅を回避しつつ生殖による苦を除去するというものがある。Cf. Torres (2020). どちらにせよ非存在は避けられている。

43 Benatar (1997), *op. cit.*, p. 345.

反映さんに文章の明らかな間違いや文意が不明瞭な点を指摘していただき、哲学若手研究フォーラムにおいて様々な方からご指摘をいただきました。誠にありがとうございます。

参考文献

- Benatar, D. (1997) “Why it is better never to come into existence”, *American Philosophical Quarterly*, 34(3):345-355.
- (2006) *Better Never to Have Been: The Harm of Coming into Existence*, Oxford: Clarendon Press.
- (2012) “Every conceivable harm: a further defence of anti-natalism”, *South African Journal of Philosophy*, 31:128-164.
- (2013) “Still better never to have been: a reply to (more of) my critics”, *J Ethics*, 17:121-151.
- (2015) “The Misanthropic Argument for Anti-natalism”, *In Permissible Progeny? The morality of Procreation and Parenting*, edited by S. Hannan, S. Brennan, and R. Vernon. Oxford: Oxford University Press.
- Benatar, D. and David Wasserman (2015) *Debating procreation: is it wrong to reproduce?*, New York: Oxford University Press.
- Feldman, F. (2004) *Pleasure and the Good Life*, Oxford: Clarendon Press.
- Feinberg, J. (1984) *Harm to Others*, New York: Oxford University Press.
- Harman, E. (2004) “Can we harm and benefit in creating?”, *Philos Perspect*, 18(1):89-113.
- Pearce, D. (2005) “THE PINPRICK ARGUMENT”, <https://www.utilitarianism.com/pinprick-argument.html> (最終閲覧日 2021年8月30日).
- (2007) *The Abolitionist project*, <https://www.hedweb.com/abolitionist-project/index.html> (最終閲覧日 2021年8月30日).
- (2015) *The Hedonistic Imperative*, <https://www.hedweb.com/> (最終閲覧日 2021年8月30日).
- Sumner, L. W. (1996) *Welfare, Happiness and Ethics*, Oxford: Clarendon Press.
- Torres, P. (2020) “Can anti-natalists oppose human extinction? The harm benefit asymmetry, person-uploading, and human enhancement”, *South African Journal of Philosophy*, 39(3):229-245.

安藤馨 (2007) 『統治と功利——功利主義リベラリズムの擁護』 勁草書房

榊原清玄 (2021a) 「ベネター型反出生主義へのブーニンによる反論の検討」『人文×社会』、第一号、229-249 頁。

—— (2021b) 「反生殖主義とは何か その定義と内容に関する論点整理」『人文×社会』、第二号、35-51 頁。

桜井徹 (2007) 『リベラル優生主義と正義』 ナカニシヤ出版。

佐藤岳詩 (2021) 『心とからだの倫理学——エンハンスメントから考える』 筑摩書房。

中川優一 (2020) 「産むことと生まれてきたこと 反出生主義における「出生」概念の考察」『現代生命哲学研究』、第九号、54-79 頁。